

ワルシャワ通信

竹浪 祥一郎

「光陰矢のごとし」という古い表現がありますが、月日のたつのはほんとにはやいものです。こちらへきたところはそろそろリーパ（菩提樹）の花が咲きはじめるころだったのに、夏はたちまちのうちにすぎ、「黄金のポーランド」といわれる秋も終わって、いまは真冬にはいりかけたところ。この二、三日今冬最初のムルス（寒波）が訪れ、気温は日中で零下六〜八度、夜間で零下一二度までさがりました。オーバーには人造毛皮の裏とカラクル（アストラカン）のえりをつけ、同じくカラクルの帽子をかぶり、防寒靴・毛皮の手袋といういでたちで外へ出ますが、寒さは思ったほどでもなく、まずまずたえられそうです。それにも建物の中はすべてスチーム暖房がきいているので、室内では日本にいるときよりもずっと薄着で、厚手のシャツなどいまのところいらないうです。

ここワルシャワにいる日本人はごく少数で、旅行者はべつとして、もう七年以上も住んでポーランド人の奥さんをもっている二人と大使館関係のをぞくと、私のほかは体育大学へ最近きた女性一人だけです。それだけに日本語を話す機会はきわめてすくなく、「留学気分」それだけ満喫できるといえまじょう。しかし私にとってここでの研究生生活はなかなか気に入っています。一つにはいろんな形の制限がないことがあげられます。市の中心部から何キロ外へ出てはいけなといった規則はここにはなく、外国人は自由に切符を買い国内のどこへでも旅行できます。またこの国民は外国人を避けようとするものもなく、反対に私はよく話しかけられ、日本のこと

をきかれたりします。うちへあそびにこないかと誘われることもしばしばで、九月にトロイミヤスト（三つの都市の意味で、グダンスク、ソポト、グダニア）へ行ったときなどは、モスクワからワルシャワへの列車の中で知り合ったグダンスク工業大学の教授や、造船所や貿易公社などの見学をアレンジしてくれたソポト経済大学の若い研究者たちの自宅に招かれ、ひじょうに歓待されました。

以前「朝日ジャーナル」に書いたことですが、私にはこうした自由な雰囲気というものがこの国の社会科学の隆盛の前提条件となっているような気がしてなりません。十二月の中ごろクラクフとチェコスロヴァキア国境に近い山の保養地ザコパネへ旅行したさい、このザコパネの本屋でカウツキーの『史的唯物論』のポーランド語訳全四冊のセットをみつけたのはちょっとしたおどろきでした。この本はランゲの『政治経済学』のなかでもしばしば引用されているのですが、ポーランド語訳がでていることはうかつながら知らなかったのです。第二部第二分冊のカパーの裏でつぎのような解説を読み、なるほどと納得しました。「カウツキーのこの本は一九二七年ドイツ語で公刊された。この誕生の世話役をつとめたのはいくつかの社会主義政党であった。当時、これらの党が科学的社会主義の理論的遺産をまだ放棄していなかった時代であった。われわれがカウツキーの本のなかでもっとも価値あるものとみなしているすべてのものは、こんにちこれらの党にとってアナクロニズムであり、運動の自由のかせとなるものである。……本書の最初の復活は、共産主義者が権力をにぎっている国でおこなわれる。カウツキーは二〇年以上のあいだ共産主義とたたかった。こんにち共産主義者は彼の本のなかに——著者の敵

意にもかかわらず——科学にとって本質的な多くの価値をみとめてこれを刊行するのである。」なおザコパネの本屋ではバクーニン選集のポーランド語訳もみかけました。

こうした考え方はいわゆる「正統派」的な考え方からすれば変則であるかもしれません。しかし古典的命題をそのまま固持して現代を分析することが可能だとは当地では考えられていません。ある経済学者は私に「マルクスの命題を後生大事にまもることはむしろマルクスに反するのではないか。マルクスの方法を学ぶことがわれわれにとって大切なのであって、ときにはマルクスの命題を否定することだってありうる」と語っていました。こうした考え方がこの国の多くの学者の視野（ここではよくホリゾントということばをつかいます）の広さを生みだしているように思えます。

こうした自由な雰囲気は当然活発な議論の流行となります。そうした論争をあつめた資料がしばしば出版されており、なかなか興味あるものがすくなくありません。そしてまた非マルクス主義者の見解を堂々と発表されています。

一つの例として農業集団化の問題についてふれましょう。よく知られているように、他の東ヨーロッパ諸国ではほとんど集団化が終わったのにポーランドだけは農地面積で社会主義セクターの占める比率がきわめて低い（せいぜい一二〜一三％）のが特徴です。ところが一方で農産物取引の面で社会主義セクターの比率はひじょうに高く、たとえば食生活にもっとも関係の深い肉類についてみますと、社会主義セクターが全体の八〇％以上を占め、ソ連の約七〇％よりも高いのです。つまりソ連ではコルホーズ農家の個人付属地がまだ大きな役割をはたしている

わけです。そこで「コルホーズはたしかに社会主義農業経営の一つの典型ではあるが、コルホーズ農家の個人経営はその有機的一部分をなしているコルホーズ共同経営と補完的關係にあり、その意味でコルホーズはその社会主義的性格にもかかわらず、農民経営の性格をも同時にもっているのではないか」という疑問もでるわけです。また農業生産の発展をはかりながら（生産低下を招くことなく）農業の社会主義化をすすめるなければならないというこの国の国民経済全体の要求もあります。こうしたことからこの国では機械的に農地面積での社会主義セクターの比率を高めるのを急ぐことなしに、国民経済全体の社会主義的性格をしだいに強めてゆく独自の方針をすすめています。

それと関連しておもしろいのは「小商品生産はたえず資本主義を生みだす」という命題はこの国の現状にはあてはまらないとされていることです。現在農家経営総数のなかで富農（つまり他人の労働力を雇用している経営）は約一割とみられています。しかし農業工業化の進行による農村から都市への人口移動とくに青年層のために農業労働者を求めることはきわめてむづかしく、労働力の面から富農化現象は極端におさえられているのが実状です。この点でポーランドの農村は一九二〇年代後半から三〇年代にかけてのソ連やルーマニア、ブルガリアとはかなりちがったもののようにみえます。ともかく過去の経験の機械的引写しでない社会主義建設方式というのがここでの支配的な考え方です。

話がすこし専門的になってしまいましたが、はじめの問題にもどりますと、この国の自由な雰囲気は民主主義の問題と関連があるように思えてなりません。証明ぬきで思い付きを記しますと、ソ連より西に近い（地理的な意味だけでなく）この国の社会主義のありかたには、西ヨーロッパにおける社会主義の未来像に近いものかをふくんでいるのではな

いかということ。それはまた過去の伝統、文化的遺産ということとも密接に関連するようです。戦後復興と工業化の初期のもっとも困難な時期にワルシャワのスターレ・ミヤストやグダンスクその他多くの都市の古い市街地を戦前そのままに再建し、破壊された由緒ある教会やその他の中世期の建造物、さらにワルシャワ創建の主であるジグモント三世の銅像（十字架をささげている……）を元どおりに再建したのは、この国の民族主義の強さや民族的特質だけに帰することはできないようです。去る十月中旬「ポーランドの十月の春」十周年を記念した論文が各新聞にのりましたが、ワルシャワでもっとも多く読まれている『ジューチェ・ワルシャヴィ』の論文はとくに感銘深いものでした。すこし長いですが、最後の部分を引用しましょう。「こんにちポーランドは人類の偉大な運動にたいして、そしてまた知的運動にたいして開放された国である。われわれは他国を訪れ、他の国の人々はわが国を訪れる。物質的財貨と文化的財貨の交流は活発になり、ポーランドのものは、社会主義を建設している国の経験の表現として世界に好奇心を呼び好評をえている。われわれの深部から、ポーランドの欲求の深部から成長してきた社会主義は新しい歴史の時期であるが、それと同時にこれまでのわれわれの歴史の継続であるという意識が、われわれのあいだで広まった。先ほど終了したポーランド国家千年祭は、われわれの歴史で社会問題と民族問題との関連がどんなにはなれがたく結びついているか、社会問題の解決がどんなに過去のポーランドの行動とポーランドの思想の進歩的代表者たちの期待であり願望の対象であったかをいま一度明らかにした。そしてこの論文は現代のポーランド作家イヴァシュケヴィチのことを引用して結びとしています。

「文化革命がどんなに新しいものに見えようと、新しいものにどんなに重点をおこうとも、われ

われはつぎのことを確かめておかねばならない。根のない花はないのだということ。葉がなく、植物全体がなく、根や幹や葉や花びらに同じようにゆきわたる樹液がない花もまたないのだということ。」

以上長々と書きましたが、我田引水という非難をうけるのを承知のうえで、東ヨーロッパの社会主義にかんする研究の重要性を再認識したことを付け加えたいと思います。われわれはこれまであまりにソ連の（あるいは中国）の経験から出発した理論にとらわれていたのではないかとということです。東ヨーロッパをひとまとめにするのでなく、それぞれの国について具体的に人民民主主義革命の第一段階にさかのぼって歴史的に研究しなおす必要があるのではないのでしょうか。ポーランドについてはもちろんのこと、他の国々についても資料はしだいにふえています。最近ハンガリーでは、シャンドル・ノグラーディという、ついさきごろまで社会主義労働者党中央統制委員会議長をしていた人の『回想録』が出版され、ポーランドの『ポリティカ』紙に二回にわたるくわしい要約がのりました。第二次大戦中からのハンガリーの最高指導者たち（ラコシをはじめ）の動向がじつに興味深くえがかれており、一九五六年の悲劇にいたる過程がよくわかります。

ともかくも社会主義にかんする理論は、政治についても経済についても古い理論にしがみつくのではなく、事実の正しい分析を通じて理論を新たに豊富化しなければならぬ時期にきています。そのためには、ランゲのことを借りると、いかにして「偏見からの解放」をなしとげるかが大切な一つのポイントであるように思われます。

ポーランド滞在もあと二カ月あまり。三月二〇日ごろから東ドイツをふり出しに東欧六カ国を一巡し、いったんワルシャワにもどったうえで五月上旬帰国の途につきます。（一九六七、一、一一）